

氏 名 查斯 查干

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2126 号

学位授与の日付 2020 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティー故郷
創出物語からー

論文審査委員 主 査 准教授 太田 心平

教授 韓 敏

准教授 新免 光比呂

教授 藤井 真湖

愛知淑徳大学 交流文化学部

監事 小長谷 有紀

独立行政法人日本学術振興会

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 查斯 查干

論文題目 オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ
—故郷創出物語から—

本研究では、新疆ウイグル自治区ホボクサイル・モンゴル自治県に居住するオイラド・モンゴルの一系統であるトルグドという民族集団を対象とし、「帰還」という過去の出来事を彼らにとっての真実として語り伝える口頭伝承をストーリー性とメッセージ性という二つの側面から分析し、困難な歴史的・社会的現実のなかで集団的アイデンティティを保持し続けるトルグドの実践を明らかにした。

トルグドは、オイラドの内争を避けて1630年代に中央アジアのタルバガタイ山脈からロシアのヴォルガ河周辺へ移住したが、1771年に現在の新疆に当る領域に帰還した集団である。その子孫たちは今日も、この「帰還の記憶」を多様な表現によって語り継いでいる。ロシアの地で140年も過ごしてから東方へ帰還したトルグドにとって、ジュンガル帝国崩壊後の空白の地は新天地であり、彼らはそこに安住の権利を獲得しなければならなかった。そこで、チベットに赴いて宗教的権威から承諾を得ると同時に、北京へ赴いて政治的権威から許可を得て、安住の権利を獲得することによって「故郷を創出」していった。トルグドの帰還に関する口頭伝承や関連する儀礼は、こうした彼らの故郷創出の歴史を伝える物語である。

本論文は、8章からなり、以下のように議論を進めた。

第1章では、トルグドの帰還をめぐる歴史研究およびオイラド・モンゴルの歴史研究と、口頭伝承に関する人類学的研究において本研究を位置づけた。

第2章では、本論文の調査対象であるトルグドの帰還に関する歴史的背景と、調査地であるホボクサイル・モンゴル自治県の概況および、現地における調査について解説した。

第3章では、架空の英雄人物アーニ・バルダンを主人公とする物語と民謡を扱った。それはロシアの追撃から逃れて移動するトルグドに必要とされる「しんがり」をアーニ・バルダンという架空の人物に託し、道中に経験した艱難辛苦を強調する口頭伝承群である。アーニ・バルダンの物語と民謡の分析から、以下のことが明らかとなった。まず歴史的事実を超えて、トルグドにとって心情的に真実であると感じられる帰還のプロセスを語るストーリーと、彼らの移動は艱難辛苦に満ちていたという心情を伝えるメッセージが物語に含まれていた。そして、物語のストーリーとメッセージが一致して、トルグドの帰還途中での苦労を共に乗り越えたという心情を表しているため、トルグドがアーニ・バルダンの口頭伝承群を語り継ぐことによって、帰還集団としてのアイデンティティを強化した。

第4章では、サンドグという架空の人物が、トルグドの帰還直後にチベットから主尊を招来する顛末を語る物語を扱った。トルグド帰還以前の時代のサンドグ物語を加えることで、このサンドグは、人びとに宗教的権威からの許諾をもたらすという恩恵を与えるにもかかわらず、宗教的権威に対して常に対抗的であり、その結果、自らの死を招くという正

負の役割を兼ねるトリックスターの性格が明らかになった。口頭伝承のなかで、サンドクは敬虔な仏教徒であるにも関わらず、そのような宗教的権威に対してトリックスターとして対抗的性格を発揮しており、人びとはそうした性格を愛し、物語を享受してきた。サンドクの物語に対する分析からは、宗教的権威を招来するプロセスを語るストーリーと、そこに埋め込まれたメッセージすなわち宗教的権威への抵抗は一致せず、さらに現在、この宗教的権威の傘下にあるにも関わらず、隠れた優越観が含まれていることが明らかになった。

第5章では、ホボクサイル・トルグドの領主であるツェヴッドルジ親王という実在の人物を主人公とする物語を扱った。領主のツェヴッドルジが北京へ行き、清朝皇帝へ謁見したことは実際にあった史実であり、一般に、清朝からの朝貢に対する恩恵とみなされる。しかし、この出来事を、トルグド自体は必ずしも清朝からの恩恵とはみなしていない。物語では、ツェヴッドルジが知恵を使って王印を取ってきたプロセスに、清朝皇帝の愚かさへの諷刺が埋め込まれていると同時に親王へも諷刺が向けられている。ツェヴッドルジの物語に対する分析からは、トルグドが清朝から親王の印を招来してホボクサイルで遊牧する権利を得る過程が伝えられる物語のストーリーと、外来の政治的権威への対抗心や自集団の政治的権威に対する揶揄というメッセージを読み取ることができた。このように、物語のストーリーと、そこに付加されたメッセージは必ずしも一致しない。このことは、清朝が与えた政治的体制を抜きにして、トルグドが集団アイデンティティを獲得していることを示している。

第6章では、トルグドの帰還途中でしんがりの役を果たしたアーニ・バルダンの魂がトルグドの人びとと共にホボクサイルへ到着したが、もともとホボクサイルを占めていたとされるカザフの守護神を追い出したので、そのカザフ守護神が災いをもたらすことを防ぐために供犠をおこなうようになった、という黒山羊祭の起源に関する口頭伝承を扱った。黒山羊祭の起源に関する語りは多く存在するものの、それらの語りはすべてカザフの守護神をめぐるものであり、それに対する畏怖と慰撫の心情が表れている。黒山羊祭に関する物語の分析から、物語には現在のカザフに囲まれて生活する社会現状が反映され、現状が帰還当時にカザフがまだいなかった事実置き換えられて真実となっているストーリーがみてとれた。ストーリーが現状を反映しているからこそ、周辺民族に対する位置づけとしての集団アイデンティティの確認になっているのである。

第7章では、近年、新疆において、国家機関職員と彼らの出身民族と異なる民族の家族とを親戚として結ぶ「結親」政策が導入された後、黒山羊祭に関する物語が変化しつつある現状を扱った。その結果、黒山羊祭の語りのストーリーは、国家の公式な言説や社会的・政治的情勢に対応しながら今も改変されつつあることが明らかになった。

第8章では、本論文の内容を要約したうえで、トルグドの帰還を語る口頭伝承について考察し、以下のことを明らかにした。(1)「トルグドの帰還」という出来事が国家の公式な歴史に肯定されているため、帰還をめぐる口頭伝承が語りの場を保持できている。

(2) 帰還を語る口頭伝承は帰還のプロセスを伝えるストーリー性と、ストーリーの陰に埋め込まれたメッセージをも携えている。(3) 物語のストーリー性が現実を反映し、支配的言説に柔軟に応じる側面を持つ。(4) 操作可能なストーリー性と操作不可能なメッ

セージ性を持つ口頭伝承を語り継ぐことによって、トルグドは社会的、歴史的な現実を生き、集团的アイデンティティを強化している。

本論文の意義は、従来行われたことのなかったロシアから中国へ帰還してきたトルグド集団のさまざまな口頭伝承を初めて収集し、その資料から口頭伝承による集団アイデンティティ構築の具体的な様相を示したことである。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 查斯 查干

Title
論文題目 オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ
—故郷創出物語から—

本論文は、17世紀前半モンゴル高原での戦乱をさけてヴォルガ河畔に移住したが、約140年後に故地である現在の新疆ウイグル自治区ホボクサイルに帰還したオイラド・モンゴル系トルグドを対象とし、彼らのあいだで保持されてきた帰還にまつわる口頭伝承群が集団のアイデンティティ形成と再編に果たした役割を明らかにするものである。

この口頭伝承の特徴は、伝承の担い手であるトルグドが伝承内容を自分たちの「帰還」をめぐる真実の歴史とみなしており、しかも語りの場が現地でいまでも維持されていることである。出願者によれば、その真実性は伝承の明示的な内容と解釈（ストーリー性）とともに、非明示的な伝承の集団的心性にもとづく解釈（メッセージ性）によっても支えられている。出願者は、社会的歴史的な出来事をつかかった口頭伝承を、この両側面に注目して分析することで、そのダイナミズムを生き生きと描き出している。語りの場との関わりも視野に入れたこの研究成果は、世界中で口頭伝承をめぐる日常的な語りの場そのものが消滅の危機に瀕している現在、きわめて貴重である。

また、現在、新疆ウイグル自治区は政治的にデリケートな状況に置かれ、フィールドワークに多大な困難をとまなう。しかもモンゴル族出身の出願者にとって、自身の母語とオイラド語の下位言語トルグド語との言語の違いは大きい。しかし出願者は8ヶ月にわたる現地調査で、卓越した言語能力を生かして調査対象者と十分な信頼関係を築き上げ、現地の豊かな口頭伝承の世界を描き出すことに成功した。本論文には出願者自らが収集したオリジナルな口頭伝承群を文字化したテキストが披瀝され、かつそれらが詳細に分析されている。

本論文の各章の内容は、以下のとおりである。

第1章では、研究史の中に本論文を位置づける。モンゴル及びオイラド（現在はオイラゴ語をモンゴル語の方言ではなく、別言語とみなす言語学者が多い）の口頭伝承に関する先行研究は、テキスト化された伝承に対する明示的な解釈やテキストそのものに注目する研究と、それらから非明示的なメッセージを読み解こうとする研究に大別できる。出願者はこのように研究史を整理した上で、その双方の接合を目指す本論文の独自性を主張する。

第2章ではトルグドの帰還という歴史事実の諸側面、調査地の概要、調査過程と方法、口頭伝承の語りの場について記述される。

続く第3章から第7章までが、主たる口頭伝承群の分析と解釈である。各章では、さまざまな伝承のヴァリエーションから明示的な内容と非明示的な内容が出願者によって取り出され、それらの内容によって語りの場が成立するか否かが決まること、また実際に語り

の場が成立した場合、その語りがアイデンティティの再編にどのように影響を及ぼすのかが示される。

第3章は、アーニ・バルダンという架空の人物を主人公とする口頭伝承を考察する。伝承では、トルグドの帰還に際して主人公が自分の命と引き換えにロシア軍の追撃をくい止めて英雄となり、その魂が帰還して移住先の守護神になる。この口頭伝承の語りの場が維持されるのは、現在の中国ではトルグドの帰還＝帰順として政治的利用（現在トルグドは中国に帰属）が可能のためである。同時に、トルグドの人びとは自分たちの祖先を導いた主人公の悲劇性に深く心を動かされ、伝承を通して集団のアイデンティティを強化する。

第4章では、サンドクという架空の俗人を主人公とする口頭伝承をあつかっている。移住前からチベット仏教徒であったトルグドは、帰還後、最高位の宗教的権威としての転生活仏に拝謁するとともに、寺院建立のために主尊（仏像）を招来しなければならなかった。伝承では、主人公がダライラマに悪態をつきながらも主尊の招来に成功するが、いざ寺院を建立するときになると破壊的な行動に出たために、人びとに抹殺されてしまう。サンドクがもつトリックスターとしての両義的性格が、宗教的権威の承認と抵抗という矛盾にあらわれている。この矛盾は中国の現体制にとって不都合ではないため、その語りの場が維持されると同時に、宗教的権威を相対化しつつ集団としてのアイデンティティが確保される。

第5章では、ツェヴッドルジという実在の貴族を主人公とする口頭伝承を考察する。主人公は贈り物を携えて北京に赴き、清朝皇帝に拝謁し、親王印を得て、移住地の領有権を獲得する。清朝皇帝が多くの試練を課すにもかかわらず、それらを機知で切り抜ける。伝承では皇帝のおろかさが強調され、同時に親王の直系子孫が絶えていることも暗示されているが、これらは現体制に対する直接的な批判には当たらないので、その語りの場が政治的に禁じられることはない。こうしてトルグドは、外在的な政治的権威には服従するが、集団内ではこれをさりげなく排除して集団のアイデンティティを維持する。

第6章と第7章では、帰還にまつわる秘儀「黒山羊祭」をめぐる伝承が補足的に取り上げられる。儀礼は帰還当時に先住集団が祀っていた守護神を追い出すと同時に慰撫するためであると解釈されてきた。だが異民族排除という解釈は、諸民族の共存調和を強調する現在の民族政策の理念に反する恐れがある。そこで、現在は春風を防ぐための儀礼という解釈が試みられている。このことは、過去からの儀礼を維持するために、トルグドが解釈を政治環境に合わせて変化させてきたことを示しており、人々による解釈の可変性を例証している。

結論では、トルグドの帰還にまつわる口頭伝承群の特徴が整理される。第一に、これらの口頭伝承は現政権のもとで政治的な利用が可能であるがゆえに、その語りの場が確保されていること、第二に、人々による過去へのまなざしが口頭伝承に反映されていること、第三に、伝承はその解釈が明示的な出来事だけでなく、非明示的だが特定の解釈が託されていると思われる内容を含んでいること、である。これら三つの働きにより、歴史を素材とする口頭伝承の真実性が担保されると同時に語りの場が維持され、その結果として集団のアイデンティティが再編、強化され続けていると出願者は結論づける。

本論文は、語りの場に臨席してトルグドの豊かな口頭伝承群を世界で初めて収集した成果として、学界のみならずトルグドの人々のためにも重要な貢献である。しかもその口頭

伝承に込められた複雑な内容を、長期調査で得た知見、語りの場に臨席した経験と、その他の文献資料に基づいて鮮明に描き出すことに成功し、質の高い成果をあげている。したがって審査委員会は、学位を授与するに値すると判断した。

ただし、口頭伝承の研究として重要な音声資料の添付がなされていないことは惜しまれる。テキストだけでなく音声の分析は、口承性の問題をさらに突き詰める次の研究の発展につながるであろう。また、本論文には欠けている他地域の口頭伝承ならびにそれらの諸研究との比較を今後行うことで、口頭伝承の普遍的な理論構築に貢献することが期待される。